

円環モデルによる対人関係上の問題の構造把握 ——対人問題インベントリー (IIP) を用いて¹⁾²⁾

白 砂 佐 和 子¹⁾
東京都立大学

平 井 洋 子
首都大学東京

対人問題インベントリーは、個人が対人関係で抱える問題を8つの方向から直接的に測定する尺度である。研究1ではその日本語版を作成し、単純尺度得点の信頼性係数と尺度間相関、個人内相対得点の信頼性係数と円環モデルへのあてはまりを検討した。その結果1つの下位尺度を除いて原版とほぼ同等の信頼性が得られ、円環モデルのあてはまりでも、少なくとも順序的には円環上に配置できることが確認された。研究2では個別面接を行い、IIPの得点が対人的な問題をどのように記述するのかを検討した。その結果、断片的にしか自覚されず、従って面接でも語られにくい問題点や相手に与える対人的な印象が、この尺度で捉えられることがわかった。特に個人内相対得点による円環グラフは、対人的な特徴がイメージとして描写され、個人理解の際に多面的な切り口をもたらすことが示唆された。今後の研究方向としては、各下位尺度の改良と、実際の臨床事例に適用しその意義を実践的な面から検討していくことが考えられる。

キーワード：対人問題インベントリー、対人関係上の問題、円環モデル、個人内相対得点

問 題

心理相談の場を訪れるクライアントの多くは、精神的・身体的症状だけでなく、対人関係における違和感や不具合を訴える。精神的・身体的な症状を分類する基準については、DSM-IV (American Psychiatric Association, 1994) 等の研究が精神医学領域で行われているほか、対人関係の側面では対人行動、対人スタイル、対人不安などについての研究 (Buss, 1986 ; 対人行動学会, 1986 ; 長田, 1996 など) が進んでいる。それに対し、対人的問題そのものをとらえようとする試みはあまり

進んでいないという指摘がある (Horowitz, Rosenberg, Baer, Ureno & Villasenor, 1988 ; 大淵, 1996)。しかし臨床現場で具体的な対人関係上の事象や葛藤に対して頻繁に治療的働きかけが行われることを考えれば、対人関係上の問題そのものが、クライアントの抱える問題を理解・解決する糸口となり、かつ核となることは明らかであろう。また、治療場面だけでなく、個人のパーソナリティ理解において、その人の対人関係のあり方を理解することが重要な意義をもつことは広く認められているといえる。本研究は、対人関係上の問題をとらえる数少ない尺度である Inventory of Interpersonal Problems (Alden, Wiggins & Pincus, 1990; Horowitz, Alden, Wiggins & Pincus, 2000; Horowitz et al., 1988) の日本語版を作成し、個人のパーソナリティを理解する際に対人関係上の問題をとらえることが果たす機能について検討する。

Horowitz (1979) は、クライアント 28 人に面接

1) 尺度使用の許可を頂いた Horowitz, L. M. 氏、また研究1・研究2にご協力を頂いた皆様に深く感謝いたします。

2) 本研究に関する問い合わせは、第一著者まで (〒192-0397 八王子市南大沢1丁目1番地 首都大学東京 心理学研究室 気付)。

を行い、彼らが訴える対人関係上の悩みを収集して127項目にまとめた。そして各項目の意味的な類似性を50名の研究協力者に判断させ、多次元尺度法やクラスター分析を行った結果、3つの次元（他者への心理的関与、その関与が友好的か敵対的か、他者をどの程度支配したいか）と、5つの内容領域（親密さ、攻撃性、追従、独立性、社交性）を得た。また Horowitz et al. (1988) は、クライアントにこの127項目（各5件法）を実施し、因子分析で6つの下位尺度（主張性、社交性、親密さ、服従、責任感、支配性）が安定して得られることを確認した。Inventory of Interpersonal Problems と名づけられたこれら6尺度（以下、IIP と略す）には、「支配性」という他者を動かし支配しようとする傾向（逆は自分の言いたいことが主張できない傾向）と、「親密性」という人と心的距離が近くすぐ親しくなろうとする傾向（逆は冷淡で人と距離をとる傾向）の、2つの次元が見出された。しかし6尺度は互いに相関が高く、「対人問題の苦情を訴える全般的な傾向」が背後にあることが示唆された。そこで Horowitz et al. (1988) はこの傾向を取り除くために、個人ごとに全項目平均から項目得点を引くという個人内相対化の手続きを行った結果、6尺度の尺度間相関を比較的独立させることができた。

Alden et al. (1990) は、IIP の個人内相対得点を主成分分析し、得られた2軸を直交回転して「支配 Domineering - 服従 Nonassertive」と「献身 Overly Nurturant - 冷淡 Cold」という、Horowitz et al. (1988) と同じ意味をもつ2軸を得た。Aldenらは、この2軸が形成する平面を、原点を中心として8つに区分し（各45度）、その上に127項目の因子負荷をプロットした。そして各項目の共通性や項目内容等を考慮しながら、8つの領域につき各8項目を選び、それぞれの領域を表す下位尺度とした。すなわち、「支配 (Domineering)」「報復 (Vindictive)」「冷淡 (Cold)」「回避 (Socially Avoidant)」「服従 (Nonassertive)」「過度な従順

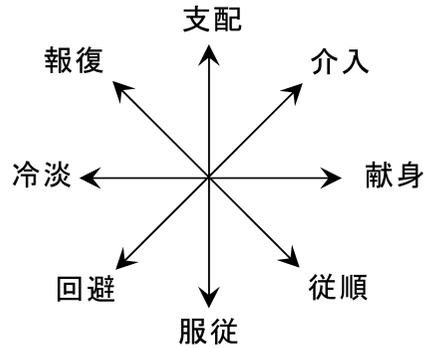


Figure 1 Alden et al. (1990) による円環モデル

(Exploitable)」「献身 (Overly Nurturant)」「介入的 (Intrusive)」である (Figure 1)。以下、この計64項目からなるIIPを、Horowitz et al. (1988) による127項目のIIPと区別するためにIIP-64と呼ぶことにする。このIIP-64に対し、個人内相対化の手続きを簡略化し、一般の18歳から65歳までの男女計800名で標準化を行ったものがHorowitz et al. (2000) である。

IIPもIIP-64も、個人の対人関係の問題を、本人の主観的な問題の大きさ（個人内相対化する前の得点）と個人内での相対的な問題の優勢・劣勢（個人内相対化した得点）の2つの側面からとらえている。個人内相対化前の得点は一般的な「苦情を訴える」傾向の影響を受ける一方、各下位領域における主観的問題の大きさを他者と比較するのに適している。一方、個人内相対得点は、個人内で相対的にどの下位領域の問題が優勢かを理解するのに適しており、各下位尺度得点を「支配性」と「献身・親密性」の2軸を基本軸とする円環上に表現することができる。円環モデルの長所は、各下位尺度が個別に存在するのではなく、円環を形成する点にある。従って各個人内相対得点の解釈のほか、グラフ・プロフィールの形状（突出する方向、突出している領域の多さ、全体的に丸いかどうか、など）に着目した人物理解が可能となる。

IIP-64の円環モデルに関する応用研究として、

質問紙で測定した人格障害の各タイプと IIP-64 との関連をみた Pincus & Wiggins (1990) がある。この研究では、「演技性」「依存性」など6タイプの人格障害群ごとに、「支配性」「献身・親密性」の2軸の因子負荷量をプロットし、演技性人格障害は「介入」方向、依存性人格障害は「従順」方向というように、各群によって対人問題の方向性が異なることが見出されている。また、Bartholomew & Horowitz (1991) は、アタッチメントタイプと IIP との関連性を分析し、安定群は「介入」「献身」「従順」領域が高く、回避群は「冷淡」「回避」「報復」方向の領域が高いなど、4つのアタッチメントタイプによって IIP の円環プロフィールが異なることを示した。これは早期の母子関係のあり方が、その後の対人関係や対人問題と関連をもっていることを示唆している。その他、Horowitz, Rosenberg & Bartholomew (1993) は、IIP の円環プロフィールと、短期セラピーで治療効果が得られやすいタイプとの間の関連性を分析したところ、「冷淡」「報復」「支配」方向の対人問題よりも、「従順」または、「献身」「回避」「介入」方向の対人問題の治療効果が高いことがわかった。この研究は、クライアントを理解し治療方針を見立てる際の情報源として IIP を実践的に活用した例といえる。

このように IIP-64 は、特に臨床場面において個人を理解し問題への切り口やアプローチ法を探る上で重要な貢献をすることが期待されるインベントリーといえる。本研究は、Horowitz et al. (2000) の日本語版を作成し、このインベントリーが個人の理解にどのような視点を提供し、どのような理解をもたらすかということ、円環グラフを中心として検討する。

研究 1

研究 1 では、IIP-64 (Horowitz et al., 2000 ; 以下、原版と呼ぶ) の日本語版を作成し、各下位尺度の個人内相対得点が日本人においても円環状に

配置できるかどうかを統計的に検討する。

方法

翻訳と研究協力者 原作者の Horowitz, L. M. 氏より翻訳および研究使用の許可を得た上で、原版の 64 項目を日本語に訳し、訳語の検討を心理学専攻の教員 1 名と大学院生 2 名が行った。これを 2000 年 7 月と 10 月に、首都圏の公・私立大 3 校の学部生計 570 名 (男性 259 名, 女性 309 名, 不明 2 名) に対し実施した。平均年齢は 19.5 歳 (18 歳から 29 歳, SD 1.55) である (以下、このデータをデータ 1 と呼ぶ)。質問紙内での項目の並び順、および項目形式 (5 件法で「全く困っていない」「少し困っている」「困っている」「とても困っている」「非常に困っている」) は原版に従った。

項目の選択 8つの下位尺度ごとに、因子数 1 を指定した探索的因子分析 (重みなし最小二乗法, 回転なし) を行い³⁾、因子負荷 0.3 未満の項目を削除した。その結果、「支配」と「冷淡」でそれぞれ 1 項目が削除されたが、尺度の内容的なバランスには問題ないと判断した。各下位尺度の項目例と α 係数を Table 1 に示す。原版における信頼性係数に比べると、「服従」と「従順」の信頼性が若干低くなっている。これには翻訳の問題、

3) 8つの下位領域は互いに関連が強く、64項目の素得点の相関行列は第1固有値が突出した構造となっている。その突出した第1因子と思われる「問題と感ずる全般的な傾向」を統計的に除外した個人内相対得点ですら、2因子までの構造でしかない。従って64項目の素得点を探索的因子分析にかけたとしても、意味のある8因子空間を得ることはおろか、平面分割に使うべき第2、第3因子が安定して得られる可能性は低い。これは多因子を同時に求める探索的因子分析の限界といえる。本研究でこのような分析方法をとったのは、下位領域ごとの内容的なまとまりはそれぞれが1因子構造を持ち、かつ尺度内の各項目が一定水準以上の因子負荷を持てば確保できると考えられたからである。なお、IIPで行われたような個人内相対化と平面分割による尺度構成の手続きは、多因子の探索的因子分析では同定しにくい微妙な測定内容を差別化するのに役立っているといえる。

Table 1 下位尺度ごとの因子負荷と α 係数^{a)}

下位尺度	項目数	項目例	因子負荷の 範囲	単純尺度得点の α 係数	原版 ^{b)} の α 係数
支配	7	・人に対して非常に攻撃的だ ・思い通りに人を支配しようとしすぎる	.557-.853	.876	.76
報復	8	・人を信頼できない ・仕返ししたいという気持ちが強すぎる	.551-.709	.848	.81
冷淡	7	・周りの人とうまくやっていくことは苦手だ ・周りの人に親しみをもてない	.411-.825	.842	.86
回避	8	・仲良くして欲しいと自分から言えない ・人前で非常に決まりの悪い思いをする	.579-.696	.831	.85
服従	8	・嫌なことをされてもやめて欲しいと言えない ・言いたいことをはっきりと言うことができない	.339-.817	.816	.88
従順	8	・人から簡単に説得されてしまう ・周りの人に自分をいのように使わせてしまう	.311-.681	.733	.81
献身	8	・人を喜ばせようとしすぎる ・自分よりも人の欲求を優先させてしまう	.318-.715	.781	.80
介入	8	・他人事に首を突っ込んでしまう ・人に注目されたいという気持ちが強すぎる	.321-.691	.766	.76

a) その他の項目については第一著者まで問い合わせのこと.

b) Horowitz et al. (2000) より.

文化差の問題、対象者の年齢層が限定されていることの問題などの原因が考えられるが、これ以上の項目削除は α 係数を下げること、日本語版という性格から項目の追加が難しいことから、計 62 項目で下位尺度を構成することにした。以下、これを IIP-62J と表記することにする。なお、単純尺度得点間の相関は.37 から.83 となり、原版で報告されている値 (.39 から.81) と、値の水準も相関のパターンもほぼ同様であった。

個人内相対得点化 原版の手続きにならい、次のようにして個人内相対得点を求めた。①下位尺度ごとの得点(素得点合計÷項目数)を平均 50、標準偏差 10 に標準化する。これを単純尺度得点と呼ぶ。②下位尺度ごとの得点を 8 つの下位領域にわたって合計し、それを平均 50、標準偏差 10 に標準化する。これをトータル得点と呼ぶ。③各下位尺度の単純尺度得点からトータル得点を引き、それを平均 50、標準偏差 10 に標準化する。これが個人内相対得点である。

上の手続きにおいて、1 項目でも欠測値のある対象者は計算から除外した。その結果、個人内相

対得点が求められたのは 521 名(男性 236 名、女性 283 名、不明 2 名)、平均年齢 19.5 歳(18 歳から 29 歳、SD 1.57)となった。欠測値の発生パターンには特に偏りはみられなかった。

個人内相対得点の信頼性

個人内相対得点は項目に分解できないため、 α 係数が求められない。原版では再検査信頼性が報告され、「支配」.56、「報復」.61、「冷淡」.56、「回避」.64、「服従」.55、「従順」.69、「献身」.51、「介入」.69 となっている。本研究では同一対象者に繰り返し実施を行っていないので、再検査信頼性は求められない。そこで回帰による残差を利用して信頼性を推定する方法を用いた。具体的には、各項目を従属変数、トータル得点を独立変数とし、単回帰分析を行って各項目の非標準化残差を求めた。これは、個人の一般的な「苦情を訴える」傾向を統制することによって、項目レベルでの近似的な個人内相対化を図ったものである。この非標準化残差の α 係数を求めた結果、信頼性の推定値は、「支配」.698、「報復」.553、「冷淡」.538、「回避」.552、「服従」.571、「従順」.240、「献

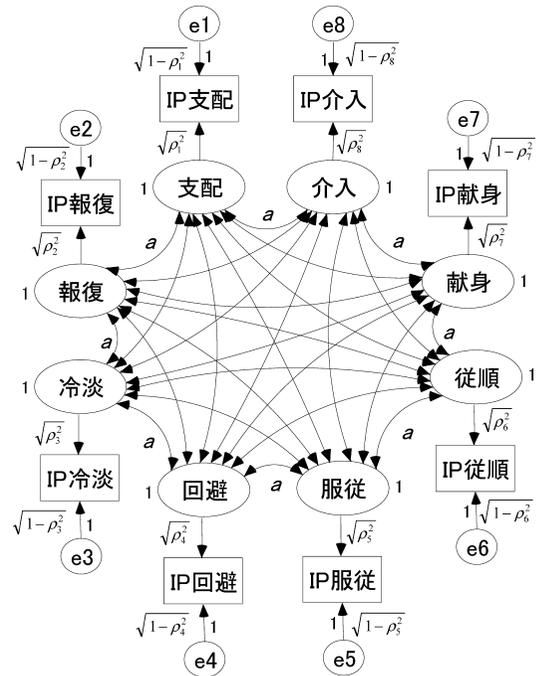
身」.555, 「介入」.560となった。原版とは推定方法が異なり単純な比較は行えないが, 「従順」以外はほぼ同水準の値が得られた。個人内相対得点は差得点であり, 一般に信頼性係数が低くなりがちであることも考慮すれば, 許容できる水準の信頼性が得られたといえる。ただし「従順」は極端に信頼性が低く, 解釈にあたっては細かな得点差にとらわれないように注意する必要がある。

円環性の確認

IIP-64の個人内相対得点には円環性が仮定されている。とはいえ, 円環性を実証的に確認したAlden et al. (1990)やHorowitz et al. (2000)における下位尺度の配置をみると, 下位尺度が厳密に等間隔で並んでいるわけではなく, おおむね等間隔に配置されているだけである。そこで本研究でも, 厳密な等間隔性にはこだわらずに円環性のあてはまりを確認する。具体的には, ①8つの個人内相対得点が2次元で説明できること, ②円環上の位置に応じて下位領域間の相関が, 隣から順に“正の大きい値から-1に近い値に順次変化し, また正の大きい値に戻る”というパターンを示すこと, ③各下位領域が「おおむね等間隔」といえるような配置になること, の3点を円環性のあてはまりの基準とした。

Figure 2に, あてはめに用いた円環モデルの基本形を示す。相関の希薄化を修正するため, 潜在変数を導入した。それぞれ1指標条件となるため, 識別性を確保するため, 上で求めた信頼性の推定値を用いて指標と潜在変数間のパス係数と残差分散を固定した。また, 潜在変数の分散をそれぞれ1に固定し, 隣り合う潜在変数間の相関が等しいという制約を入れた。対角上に配置される下位領域間の相関を-1とする制約は, モデルの適合度が許容する限り入れることとした。個人内相対得点の分布には大きな歪みがなかったので, 最尤推定法を用いた(N=521)。

まず, 8つの個人内相対得点について相関行列の固有値を求めた。その結果, 第1固有値が



注). ρ_j^2 は各下位尺度の信頼性係数, a は等値制約を表す

Figure 2 円環モデルの基本形

2.970, 第2固有値が1.834(ここまでで説明率46.7%), 第3固有値は.844となっており, このデータは基本的に2次元で説明できると判断された。

Table 2に, 円環モデルをあてはめた結果を示す($\chi^2=39.8, df=14, GFI=.982, CFI=.979, RMSEA=.060$)。各下位領域の相対的な位置関係を検討すると, 「支配-従順」の1箇所を除き, いずれの下位領域についても, 相関が隣から順に“-1に近い値に順次変化し, また正の大きい値に戻る”というパターンを示した。また各下位領域間の距離は, 「支配-介入」, および「冷淡-回避」との間が相対的に遠くなったものの, その他の潜在変数間は等間隔という制約が保持された。一方, 対角性の制約については, 「報復-従順」間に-1という制約が入れられたが, その他の組み合わせに関しては適合度の点から入れることができなかった。

以上のことから, IIP-62Jによる個人内相対得点の位置関係は, 厳密に等間隔というわけではなく,

Table 2 円環モデルをあてはめた結果（データ1）

	IP 支配	IP 報復	IP 冷淡	IP 回避	IP 服従	IP 従順	IP 献身	IP 介入
IP 支配	(.835)							
IP 報復	.863	(.744)						
IP 冷淡	.474	.863	(.733)					
IP 回避	-.676	-.309	.322	(.743)				
IP 服従	-.633	-.570	-.138	.863	(.756)			
IP 従順	-.718	-1.000	-.950	.307	.863	(.490)		
IP 献身	-.341	-.578	-.766	-.015	.178	.863	(.745)	
IP 介入	.208	-.098	-.639	-.399	-.256	.270	.863	(.748)

注. ・カッコ内は因子→指標のパス係数, その他の数字は相関係数.
 ・斜字は入れるべき制約が入れられた箇所, アミかけ部分は入れられなかった箇所.

順序的にしか配置できないという条件のもとで円環上に配置して示すことができると判断される.

交差妥当化

交差妥当性の検証のため, 2002年5月, 7月, 11月に首都圏の公・私立大2校の学部生計401名(男性233名, 女性168名), 平均年齢19.4歳(18歳から27歳, SD 1.51)に対し, 再度円環モデルのあてはめを行った(以下, このデータをデータ2と呼ぶ). 欠測値のある対象者を除外したので, 個人内相対得点を計算できたのは380名(男性220名, 女性160名), 平均年齢19.4歳(18歳から27歳, SD 1.48)であった. 1因子を指定したときの探索的因子分析の結果, 因子負荷が0.3を下回った項目はなかった. 単純尺度得点の信頼性係数は「支配」.798, 「報復」.814, 「冷淡」.829, 「回避」.864, 「服従」.858, 「従順」.787, 「献身」.830, 「介入」.788であった. また, 単純尺度得点間の相関係数は.40から.81であった.

あてはめにさいして, 個人内相対得点の信頼性を同様の方法で再度推定した. その結果, 「支配」.543, 「報復」.566, 「冷淡」.461, 「回避」.532, 「服従」.563, 「従順」.371, 「献身」.598, 「介入」.581となった. データ1と比較すると, 「従順」の信頼性がやや向上したが, それでもまだ低い. その他の下位領域は, 若干の変動があるもののおおむねデータ1と同等の水準に

ある.

個人内相対得点間の相関行列の固有値は, 第1固有値が2.366, 第2固有値が2.113(ここまでの説明率が41.8%), 第3固有値が.831となり, データ2においても8つの個人内相対得点が2次元で説明できると判断された. つぎに信頼性の推定値を更新し, データ1と同じ方針でFigure2の円環モデルをあてはめた. その結果をTable3に示す($\chi^2=46.8$, $df=16$, $GFI=.969$, $CFI=.955$, $RMSEA=.071$). 隣接する下位領域間の相関はすべて等しいという制約が保持され, 相関の値も理論値である0.707(= $\cos 45^\circ$)にかなり近い値となった. 一方, 対角性の制約については, 「回避-介入」間に入れられたのみであった. いずれの下位領域についても, 相関が隣から順に“-1に近い値に順次変化し, また正の大きい値に戻る”というパターンを示した. これらの結果から, データ2では順序的なあてはめに留まらず, その間隔的な位置関係についてもかなりの程度円環性があることが確認された.

データ1, データ2による検討の結果から, IIP-62Jにもとづく個人内相対得点は, 円環状に配置して示すことが可能であると判断することができる. ただし注意すべき点として, 下位領域の相対的な位置関係は厳密に等間隔ではないこと, また差得点を用いたために信頼性が低く, 特に「従順」には問題があるという点がある. 従ってIIP-62Jを

Table 3 円環モデルをあてはめた結果 (データ 2)

	IP 支配	IP 報復	IP 冷淡	IP 回避	IP 服従	IP 従順	IP 献身	IP 介入
IP 支配	(.737)							
IP 報復	.717	(.752)						
IP 冷淡	.038	.717	(.679)					
IP 回避	-.542	-.055	.717	(.729)				
IP 服従	-.686	-.347	.023	.717	(.750)			
IP 従順	-.582	-.679	-.628	-.073	.717	(.609)		
IP 献身	-.038	-.476	-.687	-.516	-.225	.717	(.773)	
IP 介入	.717	.040	-.578	-1.000	-.559	-.032	.717	(.762)

注. ・カッコ内は因子 → 指標のパス係数, その他の数字は相関係数.

・斜字は入れるべき制約が入れられた箇所 (入れられなかった箇所はない).

使用するとき, 得点の細かな違いに拘泥せず, 全体的な得点プロフィールに着目しながら, 個人の特徴を把握する必要があるといえる.

研究 2

研究 2 では, IIP-62J の臨床的な場面における機能を検討するために, 個別の事例を対象にした面接と質問紙を実施する. 質問紙は研究 1 で作成した IIP-62J のほか, 「主要 5 因子性格検査」(村上・村上, 2001) を用いる. 面接では, 現実の対人関係状況や家族関係, 過去の対人関係などをたずねる. この情報に加え, 面接中の様子や特徴, 雰囲気といった, その場の対人関係上の情報も検討の対象とする.

「主要 5 因子性格検査」は, パーソナリティ特性の基本的次元とされている 5 次元を測定する尺度である. 個人のパーソナリティや対人問題を理解するときのアプローチとして, パーソナリティ特性の面からとらえる方法と, 対人問題の面からとらえる方法との対比のために用いる. 面接者が直接受ける印象も検討の対象とするのは, それが個人のパーソナリティや対人問題のありかたに密接に関連する情報であるからである. 面接で本人が語った内容と合わせ, それらが IIP-62J の結果にどのように表されているのかを検討する.

方法

対象者 首都圏の私立大学の学部生 20 名に調

査協力を紙面で依頼し, 同意を得た 16 名のうち, 年齢と性別のバランスを考慮し 8 名の学生 (男性 4 名, 女性 4 名) に面接を行った.

調査手続き 調査時期は 2004 年 7 月. 面接者は臨床心理士の資格をもつ臨床経験 5 年の大学院生 (第一著者) で, 大まかな質問項目を定めて行う半構造化面接を行った. 自己紹介をしてから, 面接の趣旨と大まかな質問内容を伝え, データは研究目的のみに用いられること, プライバシーは守られることを説明した. 平均所要時間は約 60 分であり, 面接終了後, IIP-62J と「主要 5 因子性格検査」への回答を依頼した. 面接データと Big Five のまとめは第一著者が担当し, IIP-62J の分析は第二著者が, それぞれ互いに独立して行った. 個人内相対得点の算出では, 標準化の基礎データに研究 1 のデータ 2 を用いた. なお, 本論文作成にあたり, 研究協力者より論文掲載の許可を得た.

面接内容 ①現在の対人関係状況について. ②家族構成・家族関係について. ③幼少期からこれまでの対人関係について. ④自分の性格について, また対人関係で苦手と思うこと. 以上を基本として, 面接者が適宜質問を加えた. この面接において, 対人関係と性格についての質問に具体的な回答が得られなかった研究協力者が 2 名いたので, 以下の分析から除外した.

質問紙 面接が終了したのち, 実施された. 内容は (a) 研究 1 で作成した IIP-62J 62 項目. (b)

「主要5因子性格検査」(村上・村上, 2001; 以下「Big Five」と略す) 60項目。下位尺度は「外向性」「協調性」「勤勉性」「情緒安定性」「知性」の5因子と回答態度をみる妥当性尺度である。

結果と考察

はじめに「Big Five」の妥当性尺度で回答態度を確認したところ、6例とも問題はみられなかった。以下6例すべてを検討に用いた。

Table 4に、質問紙の結果と面接の情報を合わせ、事例ごとに掲載した。IIP-62Jの円環グラフにおいて、50点(平均点)はその領域の対人問題が個人内で平均的な強さであることを表し、50点より大きな得点は個人内で相対的に強く感じている問題領域、50点より小さい得点は個人内で相対的にあまり問題と感じていない領域を表す。一方、IIP-62Jの単純尺度得点は、相対化する前の得点であるため、各尺度得点の高低に本人の「問題意識」の高さや敏感さをみることができる。「Big Five」については、村上・村上(2001)に従って、60点以上40点以下のT得点をコード化したタイプ名を示した。面接については、対人関係上の特徴や自身の対人場面での性格について語られたことと、面接時の印象を分けて記述した。

Table 4において、事例Aの単純尺度得点の「総得点」は6事例の中で2番目に高かった。円環グラフでは、プロフィール全体の領域は右側寄りであること、また隣接尺度の得点の高低が連続しておらず、滑らかでないという特徴がみられた。「支配」「献身」が高いことから、他者をコントロールしようとする事と、人とすぐに近づこうとする事の問題意識が高いことがわかる。面接の内容からは、リーダー的役割を楽しんでいることや、人と積極的に関わる様子が示された。面接時の印象では誠実さを感じるものの、やや頑なな傾向があり、自分の言いたいことを厳密にそのままわかってほしいという要求がみられた。「他者と積極的に関わろうとするが、その関わりにおいては自分の主張や要求を通そうとしがちである」と

いう点で、円環グラフと面接で語られた内容、面接時の印象が一致しているといえる。なおBig Fiveの「神経質な人」というタイプは面接時の頑なな印象として表れているが、円環グラフではそれ以上の情報がうかがえ、より多面的な理解が可能となった。

事例Bでは、単純尺度得点の「総得点」が40.6と低く、全体としてあまり対人関係の問題を感じていないといえる。円環グラフでみると「冷淡」「回避」「服従」が相対的に高く、重心が左下にある。このことから事例Bは、強いていえば人に対して構え、距離をとりがちであるという点に問題意識があるといえる。面接では、慣れなれしい人が苦手であるなど、人と距離をとる傾向や受身であることが話されている。また、面接者は事例Bにまじめで硬いという印象をもった。こうした「硬さ」や「構え」は円環グラフの特徴と一致しているが、Big Fiveでは「平均人」のタイプとなり、あまり特徴が表れなかった。

事例Cも事例Bと同様に単純尺度得点が低い。円環グラフでみると、「服従」のみが高く、重心が下方にある。このことから事例Cは、対人関係に問題意識は高くないが、相対的にみると「嫌なことを断れない」とか「言いたいことが言えない」といった「服従」傾向の問題意識が高いことがわかる。面接時の事例Cは、穏やかで受動的な態度であった。また「優しくあろうと思っている」「苦手なタイプはあまりない」と語っており、人と争うことを好まず、働きかけも消極的であることが自覚されている。これらは、円環グラフと一致する傾向であり、またBig Fiveの「おとなしい因習的な人」タイプとも合致する。

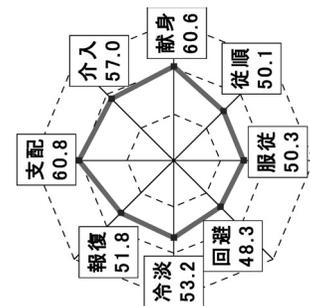
以下、事例D、E、Fについても同様に、IIP-62Jの単純尺度得点や円環プロフィールと、面接時の印象や語られた内容からうかがえる対人問題とは、基本的に合致していたといえる。

一般に面接では、本人が語る内容が乏しい場合、面接者が言葉の間を推測し、面接者の眼から

自分が悩んでいた時期に何でも話を聞いてくれた友達と、とても親しくなっている。集団でワイワイ調子に乗ってはしゃぐが、1対1になるとまじめだね、と素直さがなく、相手によって態度を変えたり、以前の自分は、そういうところがあったかもしれないと思う。

Ex: 67
Ag: 49
Co: 53
Ne: 45
Op: 43
「外交的な人」

単純尺度得点が低く、対人関係で問題と感じる傾向が弱い。対人問題の方向性は比較的バランスがとれているが、円環グラフの重心はやや右上方方向にあり、人と親密・能動的に関わることに由来する問題を感じる傾向がどちらかというところがある。

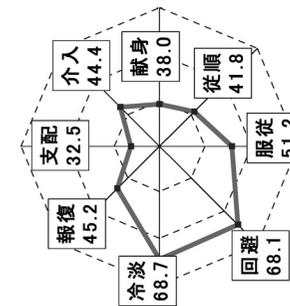


総得点：37.6

どちらかというところにいることが多い。友達つきあいは少ない。仲のよい子とも、電話やメールで連絡をとることが多い。人目を気にするほうだと思う。苦手なタイプは、自分の感情をそのまま素直に表現する人。自分の気持ちを出している人がいると、自分とは気が合わないと思う。

Ex: 32
Ag: 44
Co: 44
Ne: 41
Op: 50
「内向的な人」

円環グラフの重心が顕著に左下に片寄っている。とくに「冷淡」「回避」が高く、人と距離をとる。人との関わりを避ける方面の問題を抱えている。「支配」を除いて、単純尺度得点が全体に高く、対人関係で問題と感じる傾向が高い。

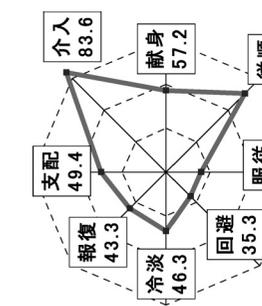


総得点：53.1

人からは「明るくさっぱりしている」「目標指向型」「(相手に)感情移入しやすい」と言われる。自分でもそう認識している。感情的になりやすく、一度嫌いなとなかなか許せないところがある。自分の利益のために他の人をだしに使うような人が苦手である。

Ex: 46
Ag: 49
Co: 31
Ne: 38
Op: 39
「だらしない人」
または
「でたらめな人」

IP得点の「介入」が非常に高く、「従順」も高い。円環プロフィールは右方向性に突出しており、上下の方向性には特徴がない。人との関係に積極的に入っていくという問題を感じている。



総得点：43.4

注. a) Exは「外向性」、Agは「協調性」、Coは「勤続性」、Neは「情緒安定性」、Opは「知性」のT得点。タイプ名は村上・村上(2001)による。
b) 8つの下位尺度の得点を合計したものを、さらに平均50、標準偏差10に標準化した得点。

観察される様子やその他の情報と合わせて理解していくことが多い。しかし IIP-62J では、そうした情報がはじめから総合され、特徴が端的に提示されていると評価することができる。一方、パーソナリティ尺度との対比では、IIP-62J が対人問題そのものに直接的に切り込むのに対し、対人問題の一因となりうる人格面をとらえるのが Big Five などのパーソナリティ尺度と位置づけられる。本研究で示されたように、対人問題に関する限り、パーソナリティ尺度で得られる情報は、間接的なもの、あるいは限定的なものにとどまるといえるのではないだろうか。

総合的考察

本研究において作成された日本語版には、いくつか改善すべき点がある。その1つが「従順」の信頼性の低さである。これにはいくつかの原因が考えられる。翻訳によって項目の意味がずれてしまったこと、日米に文化差があること、原版に比べて標本の年齢層が限られたこと、などである。ただし年齢層の影響については、原版で年齢による違いはほとんどなかったと報告されており、本質的な原因とは考えにくい。単純尺度得点に比べて個人内相対得点で信頼性が極端に下がったということは、「従順」の項目内容が IIP-62J で全体的にカバーされる内容でかなりの程度占められていたということを示唆する。ほかに「支配」と「冷淡」で1項目ずつ削除されてしまったこと、基本の2軸がはっきり対称の位置に来なかったことなどの問題も生じているので、今後は各下位領域の定義を明確化し、必要なら日本人用に修正したうえで、各項目の内容や表現を洗練させていく必要があるといえる。

こうした問題はあるものの、IIP-62J を個別事例に適用して検討したところ、IIP-62J による対人問題の傾向と、面接で語られた対人関係とは基本的に一致する結果が得られた。IIP-62J の長所としては、断片的にしか自覚されず、従って面接でも語

られにくい問題点や相手に与える対人的な印象が、この尺度によって構造化されて表現される点にある。対人場面では、重要な情報はえてして主観的・感覚的な情報である。そうした情報でも、IIP の枠組みを用いれば、数量として客観的に、またグラフ・プロフィールによって直感的・総合的に把握することが可能となる。しかもそこには、対人的な印象といった、本人の言葉以上の豊かな情報が反映されているのである。このことは、個人の抱える対人問題を理解する際に、対人関係の背景にあるパーソナリティに還元して間接的にとらえるのではなく、直接的に問題をとらえ特徴を把握していく客観的なアプローチも実現可能であることを示している。そのための方法の1つが、本研究で用いられた IIP の枠組みといえよう。

IIP-62J の具体的な応用としては、相談機関でのインテーク面接時に IIP-62J を実施し、クライエントと治療者とで情報を共有し面接目標を設定することや、見立てを補強する資料として用いることが考えられる。このような応用も含め、今後の研究としては、IIP-62J を実際の臨床事例に適用しつつ実証的に検討していくことが期待される。

引用文献

- Alden, L. E., Wiggins, J. S., & Pincus, A. L. 1990 Construction of circumplex scales for the Inventory of Interpersonal Problems. *Journal of Personality Assessment*, **55**, 521-536.
- アメリカ精神医学会 高橋三郎・大野 裕・染谷俊幸 (訳) 1996 DSM-IV 精神疾患の診断・統計マニュアル 医学書院 (American Psychiatric Association 1994 *Diagnostic and statistical manual of mental disorders*. 4th ed. *DSM-IV*. Washington, DC: Author.)
- Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. 1991 Attachment styles among young adults: A test of four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226-244.
- バス, A. H. 大淵憲一 (監訳) 今城周造・大淵憲一・織田信男・小林 裕・昨道信介・佐藤公文・難波正人・飛田 操・渕上克義・堀毛一也・水田恵三・山内敏代 (訳) 1991 対人行動とパーソナリティ 北

- 大路書房 (Buss, A. H. 1986 *Social behavior and personality*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.)
- Horowitz, L. M. 1979 On the cognitive structure of interpersonal problems treated in psychotherapy. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **47**, 5–15.
- Horowitz, L. M., Rosenberg, S. E., Baer, B. A., Ureno, G. E., & Villasenor, V. S. 1988 Inventory of Interpersonal Problems: Psychometric properties and clinical applications. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **56**, 885–892.
- Horowitz, L. M., Rosenberg, S. E., & Bartholomew, K. 1993 Interpersonal problems, attachment styles, and outcome in brief dynamic psychotherapy. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **61**, 549–560.
- Horowitz, L. M., Alden, L. E., Wiggins, J. S., & Pincus, A. L. 2000 *IIP Inventory of Interpersonal Problems manual*. San Antonio, TX: Harcourt Assessment, Inc.
- 村上宣寛・村上千恵子 2001 主要5因子性格検査ハンドブック — 性格測定の基礎から主要5因子の世界へ 学芸図書
- 大淵憲一 1996 対人行動とパーソナリティ. 大淵憲一・堀毛一也(編) パーソナリティと対人行動 誠信書房 Pp. 2–28.
- 長田雅喜(編著) 1996 対人関係の社会心理学 福村出版
- Pincus, A. L., & Wiggins, J. S. 1990 Interpersonal problems and conceptions of personality disorders. *Journal of Personality Disorders*, **1**, 270–285.
- 対人行動学研究会(編) 1986 対人行動の心理学 誠信書房
- 2004. 10. 9 受稿, 2005. 1. 21 受理—

Understanding the Structure of Interpersonal Problems: The Inventory of Interpersonal Problems Circumplex Scales

Sawako SHIRASUNA and Yoko HIRAI

Tokyo Metropolitan University

THE JAPANESE JOURNAL OF PERSONALITY 2005, Vol. 13 No. 2, 252–263

In Study 1, Japanese version of the Inventory of Interpersonal Problems (IIP) was developed and its psychometric properties examined. Reliability of the 8 simple-scale scores, pattern of intercorrelations among them, and reliability of the 8 ipsatized scores were all comparable to their counterparts in the original IIP. The hypothesized circumplex model was fitted to the 8 ipsatized scores and it was found that the circumplex structure was held, at least in the ordinal sense. In Study 2, interviews with 6 persons were conducted to examine how the Japanese version IIP described their interpersonal problems. The IIP, especially its circumplex profiles, seemed to successfully capture and delineate the features of interpersonal problems that were just fragmentarily told or indicated in the interviews. In future research, improvement of the inventory items and application of the scales to actual counseling situations to examine their merits are expected.

Key words: Inventory of Interpersonal Problems Circumplex scales, interpersonal problems, circumplex model, ipsatized score